

# 安心できる職場づくりのための労働組合

個人の「わがまま」をみんなの「いいこと」にするために

富永京子

[kyokotom@fc.ritsumei.ac.jp](mailto:kyokotom@fc.ritsumei.ac.jp)

[kyokotominaga.com](http://kyokotominaga.com)

## 富永京子（とみながきょうこ）

- 1986年、北海道札幌市生まれ
- 北海道大学経済学部経営学科卒、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了
- 立命館大学産業社会学部准教授（2015-）



# 声を上げられない日本人々

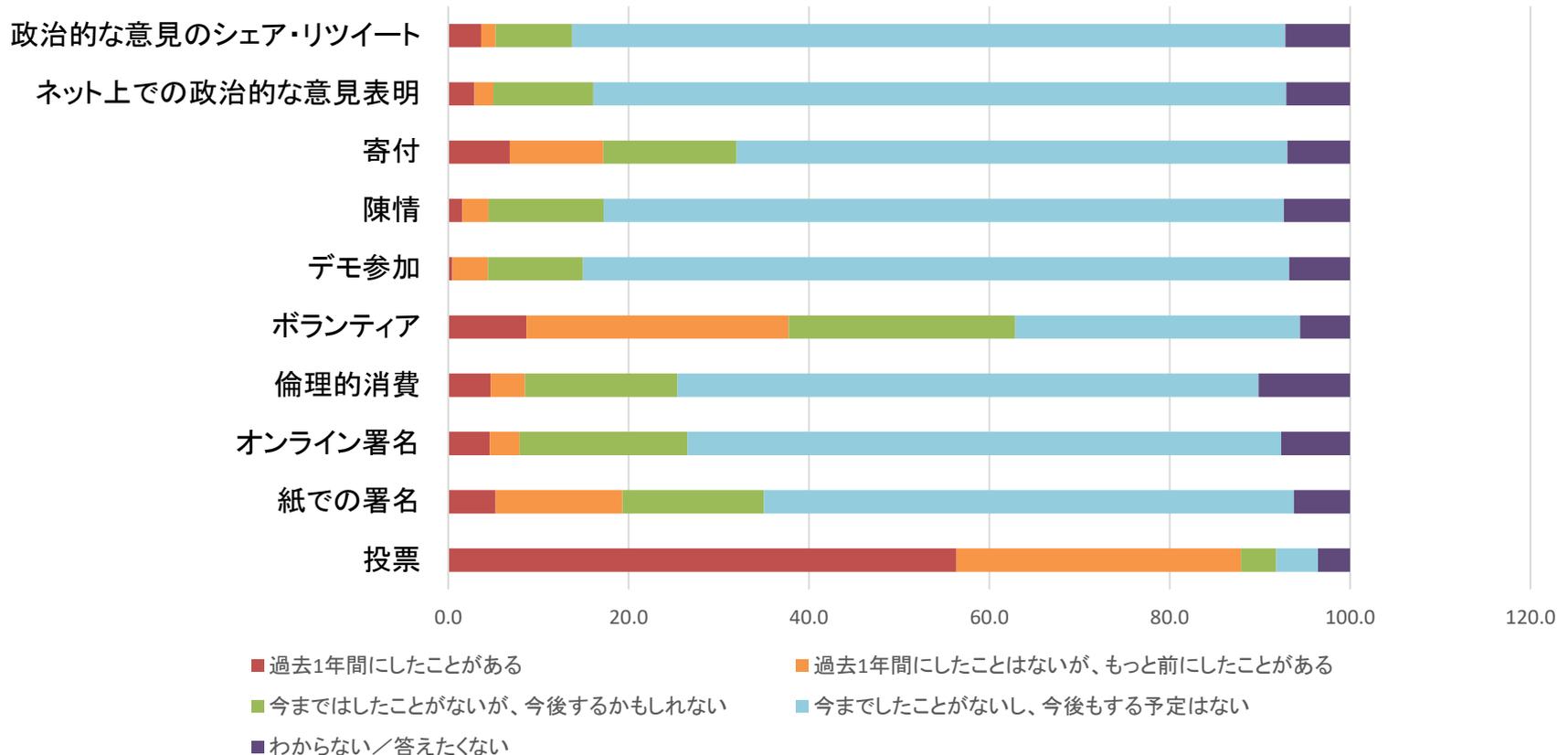
図表 5-1 デモ参加者の比率 (高順)

国/地域名	デモ参加者 比率	N	国/地域名	デモ参加者 比率	N
キプロス	61.0%	999	オーストリア	21.9%	991
フランス	55.3%	1332	オーストラリア	20.7%	1833
スペイン	55.0%	2446	チェコ	20.7%	1305
旧東ドイツ	44.7%	423	メキシコ	20.3%	1195
ウルグアイ	33.9%	1095	ブラジル	18.7%	1950
ラトビア	32.5%	990	アメリカ	18.7%	1464
デンマーク	29.9%	1157	韓国	18.6%	1293
オランダ	28.9%	1729	スイス	17.3%	1075
ベルギー	28.7%	1369	スロベニア	17.1%	1006
スウェーデン	27.3%	1250	南アフリカ	16.0%	2513
ポルトガル	26.4%	1576	イギリス	14.4%	825
カナダ	26.2%	1166	ブルガリア	14.3%	1086
イスラエル	26.0%	1171	フィンランド	14.0%	1284
旧西ドイツ	25.7%	869	チリ	14.0%	1476
ノルウェー	25.6%	1344	フィリピン	10.0%	1178
ニュージーランド	25.3%	1325	日本	8.3%	1261
ロシア	25.0%	1749	台湾	7.7%	1755
アイルランド	24.9%	1045	ハンガリー	5.1%	1022
ベネズエラ	23.5%	1195	ポーランド	5.0%	1265
スロバキア	22.7%	1033	合計	23.8%	51170

田辺俊介(編著)『民主主義の危機—国際比較調査からみる市民意識』勁草書房

# 日本における「社会運動ぎらい」

## 政治参加／社会運動経験



シノドス国際社会動向研究所「生活と意識に関する調査」N=6600、インターネット経由でのリサーチパネル調査、年齢・性別・居住地域による割当法によるサンプリング。  
年齢は20-69歳

# 日本に住む人びとと「社会運動」

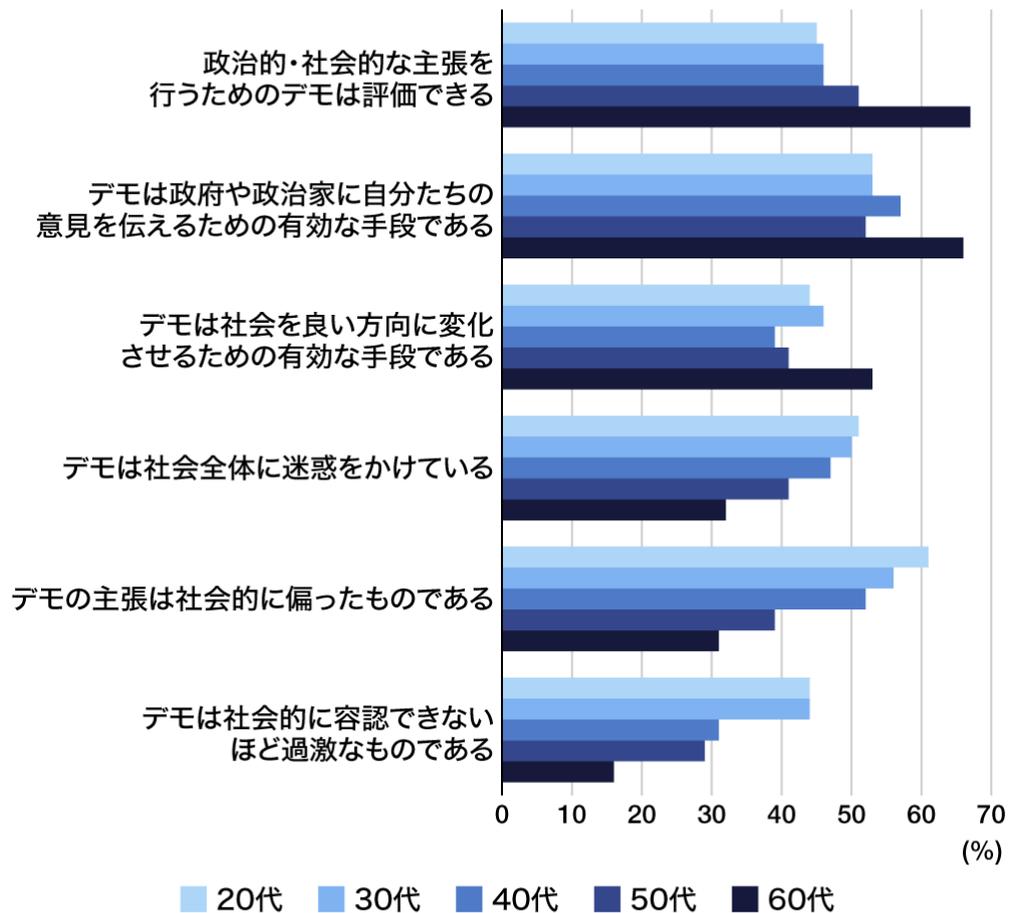
- 社会運動というと、「古臭い」「危険」というようなイメージが強くなってしまおう
- 政治的な活動へのネガティブなイメージも.....
- でも、社会運動は個々人の苦しみや痛みを「社会のせい」にするために必要だ

- それを伝えるため本を書いた  
社会運動って「わがまま」「偏っている」かもしれない、それでも声を上げることは重要！



# 「社会運動嫌い」が最も強いのは

## デモに対する世代別イメージ



「生活と意識に関する調査」(シノドス国際社会動向研究所、2019年)より作成

nippon.com

# 実際の所、声をあげるって難しい

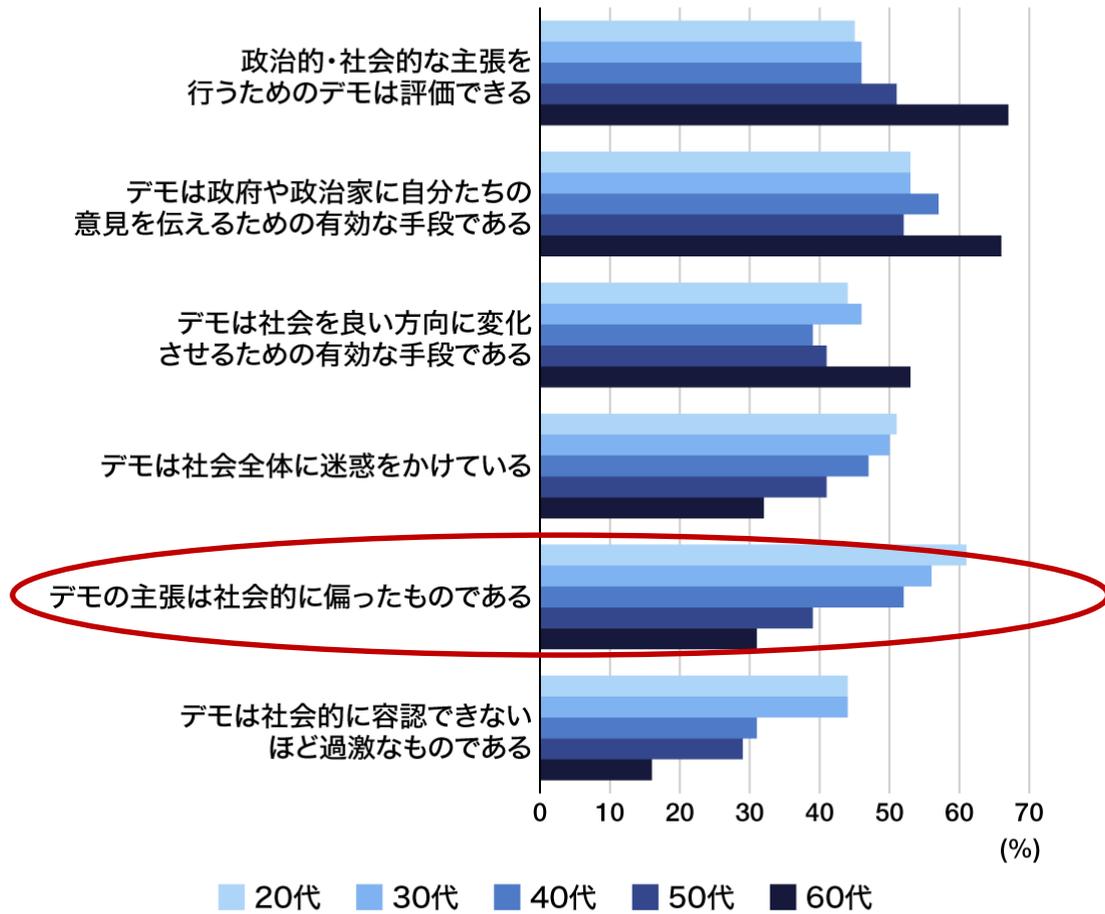


奨学金も返さなきゃいけないし、バイトもあるのに、デモなんていったら就活に差し障るかも.....

大変なことはたくさんあるけど、誰にも迷惑かけたくないから、自分で解決するほうが早いかな.....



## デモに対する世代別イメージ



「生活と意識に関する調査」(シノドス国際社会動向研究所、2019年)より作成

nippon.com

# 政治参加は「偏っている」？

- 他人に迷惑かけちゃいけない、どう思われるか怖い
- 自分を棚に上げるやつ、努力不足なやつ、責任転嫁するやつ、ネガティブなやつ、自己中なやつだと思われたくない
- 「自己責任でしょ？」 「それって甘えじゃない？」

だから、何かを批判したくないし、  
後ろ向きな意見を言いたくない



# 社会運動は「偏っている」？

- 「学生だから...」 「公務員だから...」 「新聞記者だから...」 「教員だから.....」 偏っちゃいけない、と考える人々は、若い人に限らずすごく多い
- しかし、私達は生まれた時点で偏っている（性別、国籍、出身地域.....）。
- さらに言えば、それは平等では全くない（賃金格差、機会の格差）

→ 政治を通じて自分たちの利害を追求することは、偏ってはいる。しかし、それは社会が偏っている（平等ではない）から当たり前のこと

**今の時代、なぜ社会運動は遠いのか？  
なぜ人々は職場や地域で声を上げづらいの  
か？**

## ・ますます進む「個人化」

- 職場や学校で「立場が違う人」が増えてきている。性別、世代、国籍、世帯年収、非正規／正規、勤務のあり方.....

→ 「価値観の押しつけにならないか心配」

→ 「この主張，私の“わがまま”になってしまうのではないか？」 「こんなこと言っても，迷惑をかけてしまうだけかも.....」

## ・ 将来が見えない「流動化」「不安定化」

- 自分では制御できず、計算不可能なリスクによりどのような影響を被るかわからない「リスク社会」。短期で社会が変容することに慣れてしまう

- 非正規雇用、内定切り、有期雇用.....

→ 組合活動にも影響

→ 「助けは人の為ならず」（いつか自分も助けられる）という原理のもとで互助・共助が成り立っているが、「自分の番」を待てるほど長期的な視野を持って人生を生きられない

# 「これって私だけ？」



合宿の予算、みんなそんなに出せるの？  
私は今からバイトしなきゃ貯まらない.....

みんながすごくいい部屋に住んでるように見える。自分のアパートは微妙なのに.....



みんなブランド物のかばんとか持っているし、旅行の話をよくしてる。自分は場違いに感じる.....



## ・ほんとは同じなのに、そうと言えない社会

- チープな部屋に住んでいる、合宿のお金が出せない、余暇が充実してない.....
- それぞれ同じような悩み（貧困）を抱えているはずなのに、その現れ方が少しずつ違う。しかも他社と悩みの根を共有できないために、よくある悩みでも「これって私だけ？」と感じてしまう
- 「悩み」そのものが個人化しているというより、それを個人的なものと思い込んでいて、他人と共有できない状況がある

# 「これって私だけ？」



社員が時間外労働を  
要求してくる。  
とりあえず愚痴をバ  
イト仲間と言ってや  
り過ごしている



バイト先の店長が  
ムカつく。すぐバ  
カ扱いしてくるの  
で、より頑張って  
見返そうと思う



支配人がポンコツで、  
そんなの時間内にでき  
る訳ないって仕事ばかり  
押し付けてくるので  
辞めました。

## ・ 解決の個人化、限定された解決策

- 悩みを共有することが難しいため、解決策も個人的な方法になりがち。そのため、「頑張る」か「やめる」かの二択になってしまう
- 仮に他者と共有できたとしても、集合的な問題解決の手法は「迷惑」「努力不足」として回避される。そのため「愚痴る」ととどまってしまう（もちろん、グチも社会運動の芽になるが.....）
- 悩みが共有できず、解決の手法が限られてしま

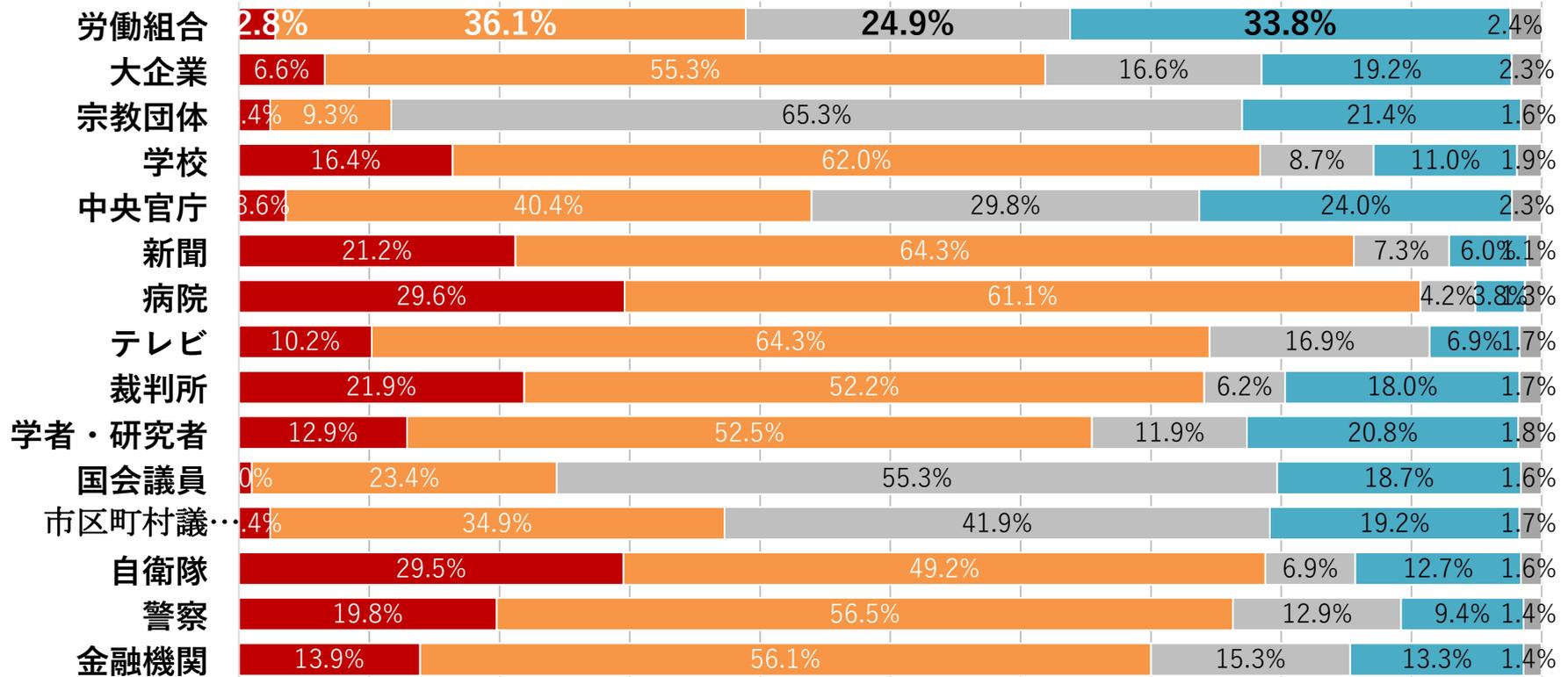
う

# 中間集団の衰退・流動性の上昇

- 地元を離れる若年層が増加し（1988→2018でおおよそ2倍に）、そのまま労働力へ。人々が地縁・血縁に支えられるものではなくなった
  - 自治会、町内会の衰退、組合組織率の低下。自治や共助といった理念が根付きづらく、そのぶん自助に依拠しなくならなくなる
- だからこそ、なにか苦しみや悩みを抱えていても「これって私だけ？」と感じてしまいうし、それを共有できる・助け合える場がない

## 人や組織に対する信頼

■ とても信頼している ■ 少しは信頼している ■ ほとんど信頼していない ■ わからない ■ 無回答



JGSS：日本版総合的社会調査（2012）

# 集団への不信感とよくわからなさ

- 「メディア」（新聞、テレビ）や「公的機関」（学校、裁判所、自衛隊、警察）に比べて、私的・自主的な集団は信頼度がやや低い
- 労働組合、そもそもよくわからない問題
  
- 利害がばらばらになっている今、「組織」や「集団」を通じて何かを解決したり、助け合いをすることに対するイメージがわからない

# 政治・社会よりも「自己解決」を選ぶ

- ある種の「自己責任論」の影響を強く受けており、政府の責任にできない（ISSP 2016）。
- 政治を通じて自らの苦境や困難を解決することは「責任転嫁」と考えることも
- 他人に対し「迷惑」と感じるハードルの低さ（内閣府 2018）

→ こうした自助への志向と、迷惑をかけることへの恐怖が、社会運動・労働運動への「不参加」を生んでいる？

# 「政治」がなくなっている社会

- 大学や地域の自治会、町内会、あるいは路上での抗議行動など、社会運動を目にする機会が減少した今、生活の場からほそぼそとでも政治参加や社会運動の練習をすることが重要

→ 労働組合や労働運動は、自分自身（の利害）を大切に  
する営みでもあるし、それを超えて、職場を改善する・  
信頼する過程でもある

**「困っている」と言える社会のために**



# 小さいことでも声を上げていい

- 「長時間労働だけど過労死レベルじゃないからいいか」「貧困だけど生活保護もらうほどじゃないから黙ってよう」
- 私たちって自分たちの要求を過小に捉えがちだけど、小さいことから言っていかないとどんどん「わがまま」言えなくなっていく

→ 小さなことでも「困っている」と認識して、声を上げていくのが大事

→ 労働運動や社会運動は、まさにこの「困っている」と言える社会を作るためにあるのではないか

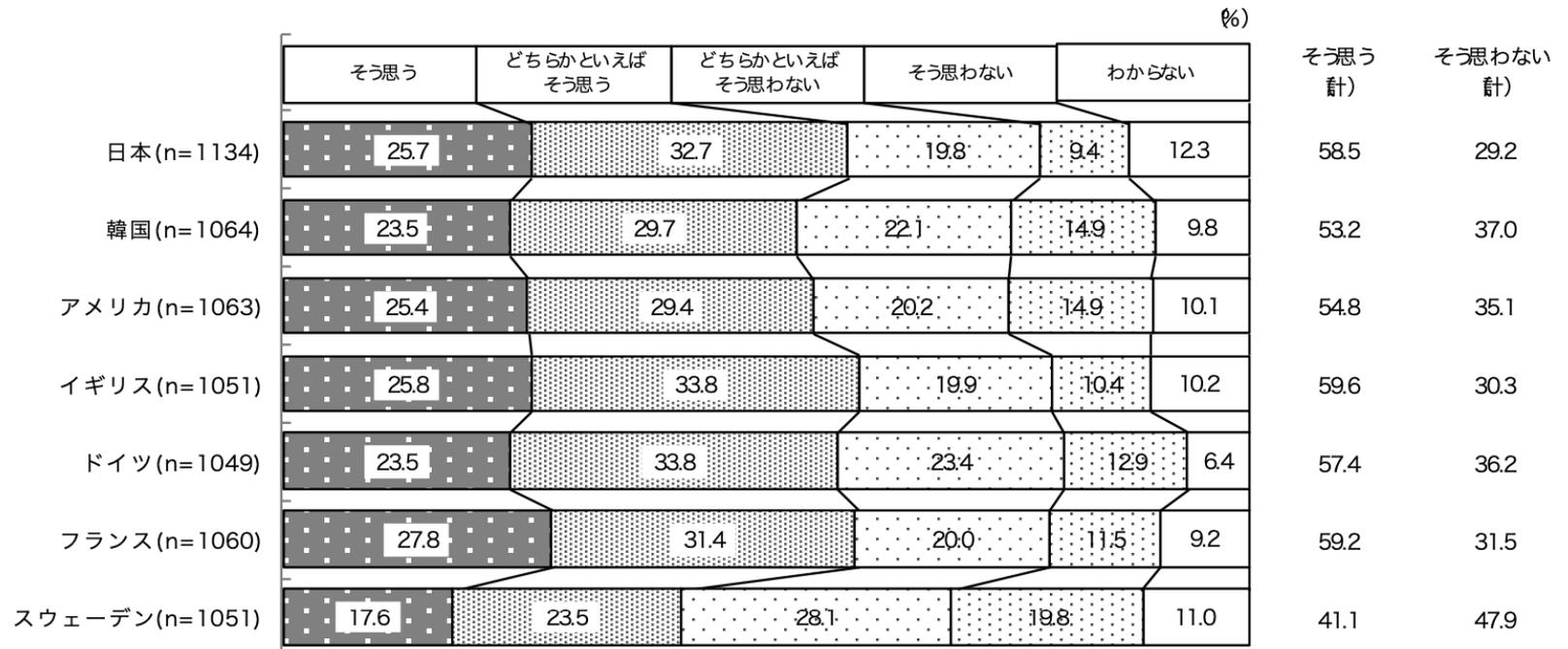
# 小さいことは社会運動の練習になる

- 「傘立て一つ置いてくれ、クーラー一つつけてくれ、というのも労働運動なんですよ」「そんなこと要求してもいいんですか!？」

→ ちょっとしたことのほうが聞き入れられやすい。成功経験を積むということは、社会運動に慣れる上でも重要

→ 身近なことから声を上げるトレーニングをし、日々の生活で「声を上げる」経験を重ねれば、「こわい」「ヤバい」と感じていたものもこわくなくなる

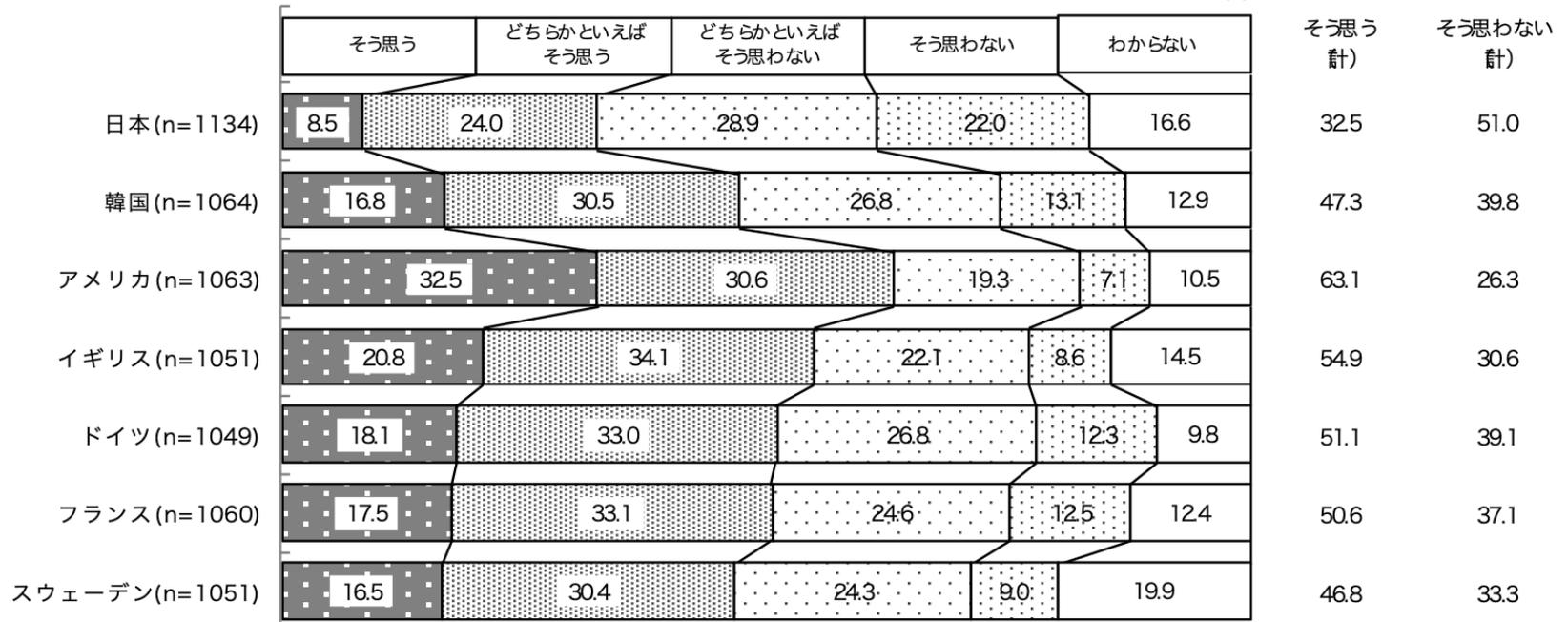
Q24 (g) 私個人の力では政府の決定に影響を与えられない



我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成30年度）

Q24 (e) 私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない

(%)



我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成30年度）

- 労働運動イコール「こわい」「ヤバい」「古い」「宗教みたい」。
- でも、そんな偏見のために、我々が変わる必要があるのか？

→ 変わるべきは、声を上げることに対してそれほどの偏見を持っている人々（もしかしたら私たち自身でもあるのかもしれない）のほうではないのか？

- 労働組合、労働運動を知らない人に「不満を言える人」になってもらう。そして「不満を言う」ことの重要性を分かってもらい、「不満を言う」人に対する偏見をなくしてもらう
  
- その手助けをするために、労働運動や社会運動があるのではないか

**私たちも疲れのない組合活動を . . .**

# こんな社会で活動をやっていく厳しさ

- 組合イコール「大変そう」「面倒くさい」「熱血」
- 政治的な活動へのネガティブなイメージ
- 担い手がとにかく少ない（デモの参加率3-5%）
- なにより「よくわかってもらえていない」

→ でも、社会運動や労働組合運動は個々人の苦しみや痛みを「社会のせい」にするために必要で、そのためには継続的に運動に従事する人が不可欠

# 私たちも疲れなない運動を.....

- 組合イコール「大変そう」「ハードそう」
- 実際、職場で声を上げるって、やっぱり大変
- でも、か細くても、人のあげる声を聞くだけでも、十分政治や社会との繋がりになるはず

→ 活動する私たち自身も、疲れなないやり方を考えながら、政治や社会に対して意見を言っていきましょう！